

(要約版)

## 「健康的な世帯」の創造 —20世紀初頭の合衆国における禁酒運動と映画製作—

助成研究者 長谷川詩織 ((愛知教育大学) アメリカ文化)

### 1. 目的

19世紀末に本格化する禁酒運動が、いかなる隣接領域と絡み合いながら、どのような教育的・道徳的言説を映画に付与したのか、映画分析を通じて解明することが本研究の目的である。映画は、19世紀末に登場して以来、労働者が安い入場料で楽しむことができる娯楽として発展する。教育効果を主張することで、映画が社会的な地位の向上を図る過程で注目されたのが、禁酒運動の言説を反映した主題であった。禁酒運動は、飲酒が人間の身体あるいは精神状態にどのような影響を与えるのか、労働意識、道徳心、家庭環境をいかに変容せしめるのか、観客に対して問題を強く喚起する題材を提供した。

映画関係者は、映画の社会的影響力をアピールするために、教育的・道徳的性格を持ち、時事性に富んだ最新の話題である禁酒運動に注目、その言説を映画のなかに積極的に組み込んでいく。報告者は、禁酒運動の言説の重層性、対立性、利害関係を配慮しながら、映画産業がサロン排除に関与した背景と、映画製作に与えた影響について、バイオグラフ社が製作した1909年の作品を中心に考察する。労働者を「教化」し「改良」する文化装置として、映画がいかに飲酒行為を扱ったのか、主に家庭を題材とする映画を中心に考えていく。映画が、「責任ある市民」による「健康的な世帯」をどのように創出し、労働者の安価な娯楽から影響力あるマスメディアとして成長する基盤を作ったのかを論じる。

### 2. 方法

本研究は、1907年から1917年を目安に、領域を横断して一次資料を収集、同時代の言説を踏まえながら映画作品を分析するものである。同時代の資料を通じて、禁酒運動を中心とする言説構造を浮かび上がらせる。複数の問題設定のもと映画作品を選定し、同時代の言説構造のなかに位置づけて解釈を加える。20世紀転換期の合衆国では、無数の映画会社により短編映画が膨大に製作されている。しかしながら、現存している作品は極めて少なく、閲覧すること自体が困難な作品も多い。そこで、研究の対象とする時期を1909年に集中させ、映画会社もバイオグラフ社作品に限定した。まず、映画業界誌の調査を通じてサロンと映画館との競合の可能性を明らかにした。次に、反サロン連盟を始めとする禁酒派の言説を重ね合わせ、4つの作品を異なるアプローチから分析する流れとした。

まず、『飲んだくれの改心 (*A Drunkard's Reformation*)』を事例に、家庭運営および教育方法の観点から、禁酒運動と映画の共犯関係について論じた。次に、社会問題を宗教的

示唆と共に扱う過程で、飲酒と贖罪行為がいかに結び付けられたのか、『小麦の買い占め (*A Corner in Wheat*)』の分析を通じて考えた。そして、救出に至るまでのプロセスに、サロンの公共的な役割を組み込んだ『淋しい別荘 (*The Lonely Villa*)』を扱ったのち、『母なる心 (*The Mothering Heart*)』の赤ん坊の死をめぐる解釈を通じて、同時代の合衆国で大衆化しつつあった優生学とのつながりを考察した。

### 3. 結果と考察

映画産業は、飲酒を不健康な娯楽と、映画鑑賞を健康な娯楽と位置づけ、家庭を健全に運営するためには、収入を酒ではなく映画に注ぎ込むべきであると主張した。映画産業のサロン排斥は、フリーランチと同じ5セントという価格的な競合性と、禁酒運動の推進者が発信する家庭中心主義が追い風となり、より説得力を増した。さらに、サロンから映画館に娯楽の場が移行する風潮は、刺激に対する人間の身体感覚の変容によっても後押しされた。映画産業によるサロン排斥は、単なる競合領域の争いに終始するものではなく、禁酒をめぐる政策的なせめぎ合い、生活スタイルの変容、それに伴う家庭観の変化、都市化による身体感覚の変化と、複数の要因が関わり合うなかで推進された。

『飲んだくれの改心』は、演劇と映画と両方を、人間を断酒に導くために有効な教育媒体であると位置づけた。それにより、飲酒を一方向的に批判するのではなく、酒に溺れた人を適切な方向に導く方法を、家庭中心主義の言説のなかで伝授することを試みた作品である。『小麦の買い占め』は、小麦市場の独占の実態を暴くことを目的としており、禁酒運動を直接に反映している作品というわけではない。だが、独占者の祝宴の場面は、農民、労働者、資本家の結びつきが阻まれていることを示唆し、経済を健全な状態にすることを求める禁酒運動の言説と接合する事例と位置づけることができる。

『淋しい別荘』は、飲酒を否定的に解釈する先の2作品とは対照的に、救出劇のなかでサロンの公共的な機能を前景化させた作品である。地域に点在する諸機能が理想的に結びつくことで母娘の救出に成功、地域ネットワークの一端を担うサロンの公共的な重要性が、救出に至るプロセスのなかで示唆された。『母なる心』は、ビアガーデンを家庭崩壊の引き金となる誘惑の場と捉えるのみならず、夫の飲酒と浮気、妻の精神的不安定を、赤ん坊の不健康の原因であると捉え、赤ん坊を産むための良好な環境がなかったことを示す。

映画が禁酒運動に参加するとき、飲酒=悪とする図式を踏襲するのではなく、教育方法、経済、公共、優生学など、隣接する諸領域の言説のなかに、飲酒やサロンを定位させることで、議論に説得力を持たせている。禁酒運動の言説は、とくに経済の領域を中心に、多様な形であらわれる。それゆえ、一見すると禁酒運動と無関係に思われる映画のなかにも、禁酒運動との連動、衝突、葛藤を示す場面が含まれている可能性が高い。そのため、継続的な調査を通じて、禁酒運動と映画製作との間にある関係を、多角的に解明していくことが今後の課題となる。